

ド イ ツ の 東 洋 学

— 附 日 本 学 —

田 村 実 造

わたくしは昨年の夏、西ドイツのミュンヘン大学で開催された國際東洋学者會議に、日本學術會議から派遣されて出席した。ついで、おなじ西独のマールブルグ市で開かれたソナ学会にも参加したのち、ウィーン、モスクワ、レニングラード、コペンハーゲン、ハムブルグ、ベルリン、ロンドン、ケムブリッジなどを歴訪し、これらの地における東洋学研究の現状を視察した。

わたくしの旅行は、なにぶんにも、かぎられた日時であつたので、各地での視察も、ほんの走り見する程度にすぎなかつた。ただ、そのみじかい期間中の大半をドイツにすごしたため、ドイツにおける東洋学研究の現状について、すこし見聞したところを紹介してみよう。

東 洋 学 者 會 議

この會議は、正しくは國際東洋学者會議 (The International Congress of Orientalists または Der Internationaler Orientalisten-Kongress) とし、四年目にと開かれる。このたびのものは第一四回といわれるから、その歴史は古く、前世紀からなほじつたわけ

である。第二四回會議は、昨年(一九五七)八月二日から九月四日までの八日間ミュンヘン大学を会場として開かれ、参加者は千数百名をかぞえた。学会の内容も、東は日本・朝鮮から、西はエジプトにまでわたる広大な地域であるため、一四部会にわかれ、研究発表の数も四五〇件に達する盛況であつた。

Sektion I : Ägyptologie (発表数42)

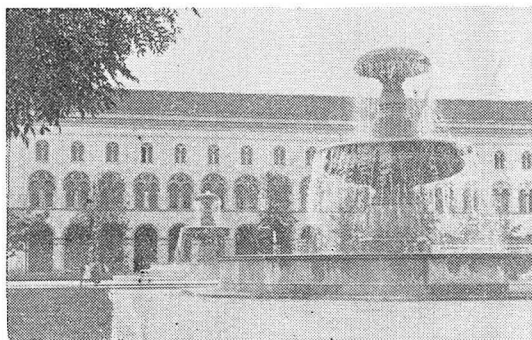
- " II : Keilschriftforschung und Vorderasiatische Archäologie (" 56)
- " III : Altes Testament, Biblische Archäologie und Judaica (" 17)
- " IV : Christlicher Orient und Byzanz (" 17)
- " V : Semitistik (" 23)
- " VI : Islamwissenschaften : Sprach und Literaturwissenschaft (" 34)
- " VII : Islamwissenschaften : Religion, Geschichte und Kunst (" 43)
- " VIII : Turkologie (" 26)

- " IX : Iran in Kaukasus ( # 37 )
- " X : Indologie ( # 41 )
- " XI : Zentralasien und Altasien ( # 25 )
- " XII : Ostasien a) China ( # 34 )  
b) Japan und Korea ( # 11 )

- " XIII : Südosiasien ( # 16 )
- " XIV : Afrikanistik ( # 28 )

右に表示したところからもわかるように、この学会では、東洋学といつても、西アジアに関するものがとくに多いことである。すなわち、西アジア関係の部会は第二から第九までの都合八つの部会——第一部会のエジプトを含めば九部会をかぞえる——を占め、発表の数も二五〇余件となつて、全体の約六〇パーセントにあたる。

これはヨーロッパの東洋学成立の歴史や西アジア地域が地理的にヨーロッパに接近していること、あるいは十字軍との関係、またエジプト文化とギリシア・ローマ文化との関係、その他いろいろの理由によるものではあるが、日本の学界が、これまで中国史や北アジア史を主として研究の対象としてきたとは、研究分野の上で大きなへだたりがある。わが国でも最近、西アジアやインドに対する関心が高まりつつあるが、将来この間隙をうずめるものは、やはり米國とソ連の東洋学界であらう。すなわち、米國の東洋学者たちは、早くから西アジアの歴史研究や考古学的探險調査をおこなつてきたが、大戦後は、さらに日本・中国および北アジアやインド方面の研究に対しても、非常な熱意をかたむけつつあり、おなじようにソ連邦でも、自己の領域にひとしいモンゴリアや中央アジア・コーカサ



第一図 ミュンヘン大学

ス地方はもとより、中共との密接な関係からして、中国史に対しても大がかりな研究をおこないつつあるからである。

つきに、この学会における発表者を国別にみると、独・英・仏がだんぜん多く、米國がそれにつぎ、ソ連の学者たちも一、二名ずつではあるが、各部会にそれぞれ参加していた。日本代表としては、わたくしのほかに東京大学の山本達郎、横浜大学の小林高四郎両教授も参加されたので、小林教授と田村とは第一二部会(a)の東アジアに、また山本教授は第一三部会の東南アジアにおいて、それぞれ研究発表をおこなつた。

なお、全部会を通じて発表者も参加者もすくなく、低調であつたのは、第一二部会(b)の日本・朝鮮の部であるが、これはヨーロッパの学界としては、やむをえないことであらう。それでも、最終日の総会において、今回第一二部会(a)中国、(b)日本・朝鮮とわけられたのを、つぎの一九六〇年レニングラードで開かれる

予定の第二回会議には、日本学部会を独立部会とするよう提案がおこなわれたことは、われわれにとつて心強い思いがした。

## シナ学会

ミュンヘン大学における東洋学者会議が終了した翌日の九月五日から、中部ドイツのマールブルグ市の国立図書館で第一〇回シナ学会がはじまつた。この学会は The Junior Sinologists Conference といわれているように、少壮シナ学者たちを中心に組織された学会であるが、老シナ学者も多数参加していた。今回の参加者を名簿によつてみると一五八名をかぞえ、これらを国別によると、ドイツが地元だけに、もつとも多く六六名、イギリス二七名、フランス一六名、米國、オランダ、ホンコン各五名、日本、ソ連各四名、台湾三名その他である。

東洋学者会議が、古い伝統をもつ儀式ばつた公的な国際学会であるのに対し、これはくつろいだ学会で、研究の範囲は、いちおうシナ学——中國に関する史学・文学・思想・哲学・美術考古学——にかぎつてはいるが、研究発表は前者が質疑応答をも入れて三〇分前後なのに対して一時間をふりあて、充分にしゃべらせるといふ方針である。また会場もヨーロッパ各国を順番にまわることになつていゝらしく、毎年開かれていゝるので、第一〇回とはいつても大戦後からはじまつたものである。

## ドイツの東洋学

かつてはクラップロート、ヒルト、ラウファ、ロイマン、ミュレ

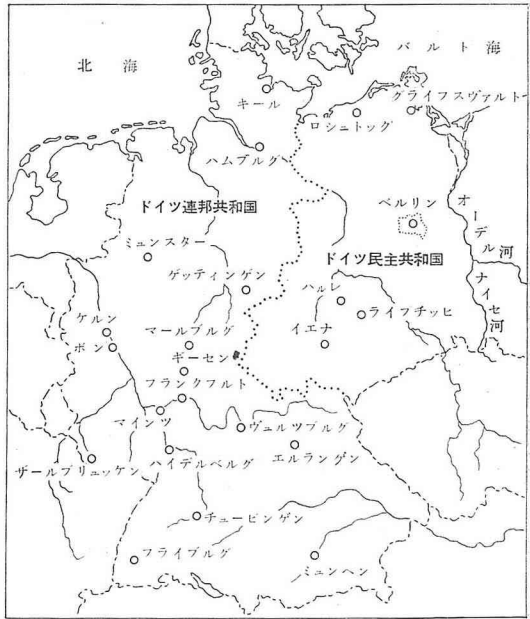
ー、フランケら多数の東洋学者を出したドイツの東洋学界も、その後にはポツペ、ウイットフォーゲル、阿氏が米國に去り、わずかに満蒙語のヘーニシニ教授が最長老として、とどまるばかりで、凋落をつたえられていたが、わたくしが滞在中に見聞したところからすれば、ドイツ東洋学界には、大戦後十余年にして、往年のはなばなしさを再現しようとする素地がつくられつつあるかにかがわれた。

御承知のように、現在ドイツは政治的には西のドイツ連邦共和国と東のドイツ人民共和国とにわかれているため、しぜん学界も東西に分離させられているが、それにもかかわらず、かれらは研究への情熱によつて、この障害をのりこえようとしているかにみうけられる。昨年の東洋学者会議の期間中の九月三日夜、ミュンヘンに集つた東・西ドイツの東洋学者たちは、ウラル・アルタイ学会の会合をもち、ハラソウイッツのきも入りで一室に会したが——たまたま、わたくしも招待をうけて、小林教授とその席に列したが——かれらは、このような機会を利用して、しきりに学問的交歓をおこなつていた。

つぎに、ドイツの東洋学の現状を、大学を中心にみることにしよう。現在西ドイツにはミュンヘン、エルランゲン、チュービンゲン、フライブルグ、ブルツブルグ、フランクフルト、マインツ、ボン、ハイデルベルグ、ザールブリュッケン、ケルン、ミュンスタール、マールブルグ、ゲッティンゲン、ハムブルグ、キール、ギーゼン、ベルリン自由大学など一八の総合大学がある。このうちミュンヘン大学は、西ドイツ中でもつとも大きく、学生の総数も一万五・六千名くらいといわれる。これにつぐものはハムブルグ、ボン、ベルリン

第 1 表

Seminar の 名 称	教 授 名
<b>Munchen 大 学</b>	
東アジアの文化と語学 (Sinologie)	H. Franke
日本学 (Japanologie)	H. Hammitzsch
インド学・イラン学 (Indologie, Iranistik)	H. Hoffmann
近東トルコの歴史と文化 (Turkologie)	F. Babinger (講師 H. Kissling)
エジプト学・古代オリエント史 (Ägyptologie)	H. Stock
<b>Hamburg 大 学</b>	
シナ語学・文学 (Sinologie)	{W. Franke (中国史) {(講師 T. Grimm 明代思想史)
日本語学・文学 (Japanologie)	{O. Benl (日本文学) {G. Wenck (日本音韻学)
インドネシア語・南海語	{O. von Essen {E. M. Kähler
インドの文化と歴史 (Indologie)	{Alsdorf {Schubring
前アジアの歴史と文化 (Orientalisches Seminar)	{B. Spuler (イスラム学) {Johansen (フィン・ウグール学) {W. Lentz (イラン学) {A. von Gabain (トルコ学・ {シナ仏教学) {O. Pritsak (アルタイ語学・ {中央アジア史)
<b>Bonn 大 学</b>	
東アジアの歴史と文化 (Ostasiatisches Seminar)	{P. Olbricht (Sinologie) {O. Karow (Japanologie)
蒙古学 (Orientalisches Seminar)	W. Heissig (Mongologie)
<b>Berlin 自由大学</b>	
東アジア学 (Ostasiatisches Seminar)	{W. Fuchs (Sinologie) {Eckardt (Japanologie)
インド学・イラン学 (Indologie, Iranistik)	O. Hansen
古代東方語学 (Altorientalische Philologie)	J. Friedrich
イスラム学 (Islamwissenschaft)	W. Braune
西アジア・蒙古学 (Vorderasiatische Archäologie)	A. Moortgat



第二図 ドイツの大学所在地

自由大学などであるが、わたくしが訪問したのは、この四大学であった。これらの大学には、いずれも東洋学に関する Seminar が設けられているが、その教授陣をあげてみると、第1表のようである。

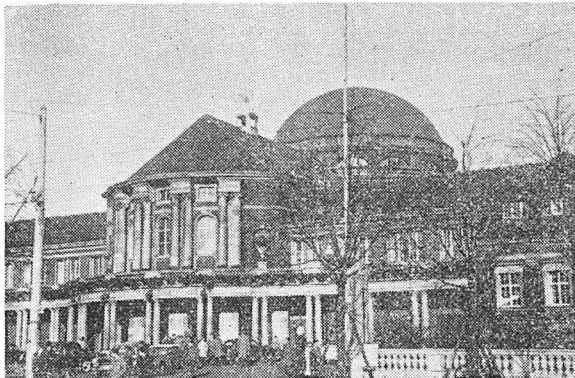
第1表のうち、われわれに関係のふかいシナ学および日本学担当のひとびとと、その専攻分野についてみると

**ミュンヘン大学** この H. Franke 教授は、元代史・明代史を専攻し、かつてホンコンの領事をしていたこともあるため中国語に堪能である。かれは、このたびの東洋学者会議には書記長(General-

secretary)として活躍し、その行政手腕も高くかわれている。日本の Hammitzsch 教授は、江戸文学とくに俳諧の研究家として知られ、氏の日本語は折紙つきである。戦後もたびたび来日しているため、わが学界の消息にもよく通じている。

**ハムブルグ大学** 東洋学に関するかぎり、東・西ドイツを通じてもつとも充実した陣容と豊富な蔵書をほこっているのはハムブルグ大学であろう。このシナ学には、W. Franke 教授と講師として T. Grimm 氏がいる。W. Franke 教授は、有名な東洋学者 Otto Franke の令息で、おっとりした人柄は毛なみのよさを示している。明代史の専門家、戦前北京に長く滞在していたことと、夫人が中国婦人であるため、かれの中国語はドイツ随一であろう。

→ Grimm 講師も明代文化史・思想史の研究者であり、氏も中国でそだつたため、中国語はまつたくうまい。昨



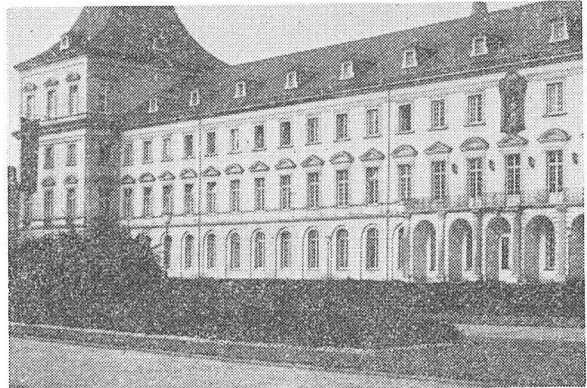
第三図 ハムブルグ大学本部

年二月から七月末まで東洋史学研究のため本学に留学していた。

日本学には O. Beil と G. Wenck の両教授がいる。前者は近世文学、とくに歌論や禅と芸術に詳しく、後者は日本語の音韻学者である。このほかハムブルグ大学の東洋学の特色は、西アジア・中央アジアおよびアルタイ語学が充実していることである。すなわち、イスラム学には B. Spuler、フィン・ウグール学には Johansen、イラン学には W. Lentz の三教授が、また中央アジア、北アジアには、A. von Gabain (トルコ学、シナ仏教学) O. Pritsak (アタイ語学、中央アジア史) の両教授がいて、いずれもがやかしい業績をあげている。なお、スプラー、ガバイン、ブリツアック教授らは、現在かれらがうけている科学研究費を投じて、白鳥博士、羽田博士をはじめとする、わが東洋学者の北アジア史や中央アジア史関係の著書・論文を抄訳させつつあるが、これは、日本の東洋学がドイツにおいて、いかにたかく評価されているかの一証といえるであろう。

ボン大学 ボン大学のシナ学には、元代駅伝の研究で知られる P. Oltbricht 教授がおり、日本学には、日本医学史の O. Karow 氏が、また Orientalisches Seminar には、ゲッティンゲン大学から転じた蒙古学者の W. Heissig 氏がいる。

ベルリン自由大学 この大学は、戦後ベルリンが東西に分割されたとき、ベルリンの郊外 Dahlem に新設されたもので、その建学の歴史こそ浅いが(新興の意気にもえてゐる)。この Ostasiatisches Seminar はシナ学で W. Fuchs 教授、日本学で Eckardt 氏がいる。前者は戦前・戦中を通じて満洲(奉天)および北京に滞在し、満洲語学に詳しく、中国語および日本語が巧みである。後者は



第四図 ボン大学

滞日一四年、雅楽を中心とする日本音楽史に深い造詣を有している。以上のほかケッティンゲン大学の教授(シナ学者)、ベルリン自由大学の H. W. Haussig (中央アジア史家) 氏らも業績をあげている。

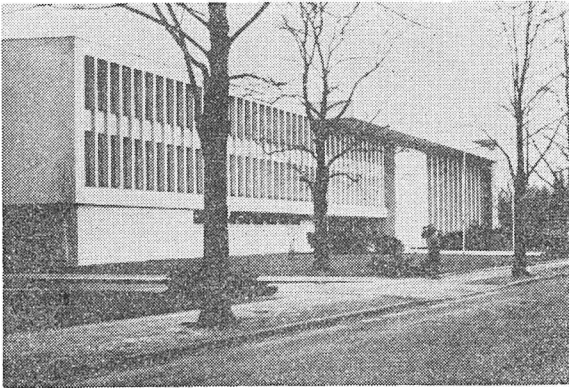
なお、西ドイツにおける東洋学関係の主なる雑誌および叢書としては、左記の五種があげられる。

### 歴史関係のもの

1. Oriental Asiatic Journal (年四回刊行、一九五五年より)
2. Göttingen Asiatische Forschungen (俗にゲッティンゲン＝アジア双書とよばれる)
- 言語学関係のもの
  1. Ural-Altäische Jahrbücher (年一回刊行、一九五二年より復刊)
  2. Ural-Altäische Bibliothek

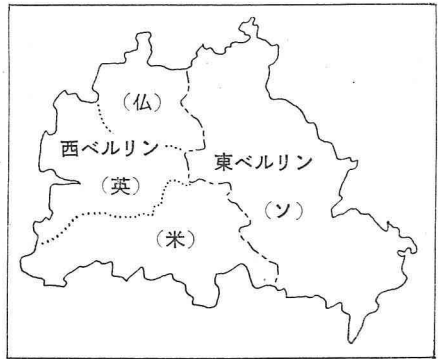
3. Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft

そのほか Humboldt 大学のシナ学研究室 (Seminar für Sprache und Kultur Chinas) から、O. Beul, W. Franke および、  
 ヘルン自由大学の W. Fuchs 教授三氏を編輯者とする *Oriens  
 Extremus*、おなじく日本学研究室 (Seminar für Sprache und  
 Kultur Japans.) を中心に *Nachrichten der Gesellschaft für  
 Natur und Völkerkunde Ostasiens (Hamburg)* が発行されている。



第五図 西ベルリン自由大学

つきに東ドイツについでみると、こゝには東ベルリンの Humboldt 大学 (旧ヘルリン大学)、Leipzig 大学をはじめ Greifswald 大学、Rostock 大学、Halle 大学、Jena 大学など六大学がみられるが、そのうち *Ostasiatisches Institut* をもっているのは、フンボルトとライプチヒの両大学だけである。

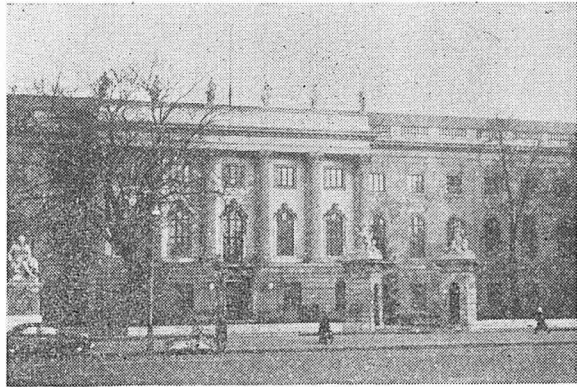


第六図 東・西ベルリン略図

フンボルト大学  
 フンボルト大学の *Ostasiatisches Institut* は中国、日本、朝鮮、蒙古および西蔵の五部門からなり、現在教授八人、講師一人、助手・研究生五人、学生三五人を受容している。主任教授の *Ratchevsky* 氏は中国法制史家で、著書として元史刑法志の仏訳がある。

最後に、参考のため学生の学費についてみると、東ドイツの大学生は、ソ連の大学生と同じく全員がは国費を支給されているようであるが、東ドイツでは二二〇マルク (A) ないし一四五マルク (B) — A・B の差は成績順によつてきめられる — をうけている。ただし、父親の俸給が一、〇〇〇マルク (わが八六、〇〇〇円) 以上の場合、その子弟は支給を停止される。かれらの在学年限は五年間で、そのうち最終の一年は、それぞれ専攻する外国 — ソ連圏内にかぎる — に留学する。卒業後三年間研究生としてとまれば、ドクターの称号をうける。

以上、わたくしの見聞したかぎりにおいて、西ドイツと東ドイツにおける東洋学界の現状を紹介したが、ただ東ドイツについては、



第七図 東ベルリン、フンボルト大学

いろいろの事情から東ベルリンのフンボルト大学と東ドイツ国立図書館とを訪問しただけであつたので、充分な消息を知ることができなかった。

なお、はじめの予定では、ソ連邦における東洋学研究の現状についても、のべるつもりであつたが、すでにあたえられた紙幅をこえたので割愛することにした。

これに関しては雑誌

(一九五八・三・八)

「東洋学」第一六輯にのせておいたから、あわせよんでいただきたい。

史学研究会例会 予告

五月例会

五月一〇日(土曜日) 午後一時より 於京大薬友会館

講師演題

中岡慎太郎の「藩」論について

—日本における絶対主義理論の萌芽—

池田敬 正氏

(題未定)

絶対主義と市民革命

島田虔 次氏

六月例会

六月七日(土曜日) 午後〇時半

京大史学科陳列館前出発

臨地講演

コース 二条城—二条陣屋—角屋

以上バスにて巡回(講師未定)

参加会費 一五〇円

定員の関係がありますので、参加御希望の方は、五月末日までに当会宛御申込下さい。(但し満員次第で切ります)

七月例会

七月五日(土曜日) 午後一時より 於京大薬友会館

「技術史の諸問題」 (講師は追て発表いたします)

史学研究会委員の交代について

委員末尾至行氏(地理)及び笠沙雅章氏(東洋史)は、事情により三月末日をもって辞任し、代つて押野昭生氏(地理)横山裕男氏(東洋史)が新たに委嘱されました。以上